

『無量寿経論』テキストの検討

辻本 俊郎

一、序

『無量寿経論』（以下、『論』とする）テキストは宋版や高麗版などの、刊本一切経の中に収められているもの、あるいは写本などとして残っているもの、さらには『無量寿経論註』（以下、『論註』とする）に引用されている『論』などがある。^{〔1〕} 筆者は、平成七年度より九年度まで行われた佛教学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班（主任・香川孝雄教授、以下、香川班とする）にて、『論』研究会に参加する機縁を得、佛教学岸一英教授の指導の下、『論』諸本の字句の異同や改行箇所を具さに調査し、系統を跡付けた。その結果、

A 系統 A 1 東禅寺版、開元寺版、房山雷音洞石刻本

A 2 思溪版

A 3 磧砂版、杭州版

B 系統 高麗再雕版、房山雲居寺石刻本

C 系統 『論註』に引用される『論』

と結論づけた。^②この調査の中で、『論』と『論註』に引用された『論』との字句の異同が著しいことが判明した。字数一つとつて見ても、『論』よりも『論註』に引用された『論』は一八六字も多く、^③わずか三〇〇〇字足らずの書物からすれば、これは驚嘆に値する。特に『論』はサンスクリット本原典やチベット語訳本などと対照できないだけに、諸本を対比し、どのテキストを採るべきか十分な検討が不可欠である。したがって『論』の思想的研究に先立ち、まずこれらの問題を扱わなければならないと考えられる。

そこで、小論では『論』諸テキスト間で特に大きく異読の生じた箇所を取り上げ、検討を加えたい。^④

二、題目について

(1) 無量寿経優波提舍経

東禅寺版、開元寺版、思溪版

(2) 無量寿経優波提舍

磧砂版、杭州版、房山雲居寺石刻本

(3) 無量寿経優波提舍願生偈

高麗再雕版

(4) 優波提舍経願生偈

房山雷音洞石刻本

(5) 無量寿経論

正倉院聖語藏本

(6) 無量寿経優婆提舍願生偈

親鸞加點本 『論註』に引用された『論』

香川班で蒐集された『論』テキストの表題は以上の六種である。この中には、通称としての『往生論』、『浄土論』という呼称は全く見られない。^⑤現在、『論』の具名は「無量寿経優波提舍願生偈」とされているが、これを支持しているものは高麗再雕版、『論註』に引用された『論』の二本のみである。また、この中で副題を有するもの

もある。すなわち、東禪寺版、開元寺版、思溪版、磧砂版、杭州版、正倉院聖語藏本である。東禪寺版、開元寺版、思溪版、磧砂版、杭州版、すなわちA系統では、

無量寿経優婆提舍願生偈

となっており、正倉院聖語藏本では、

優婆提舍願生偈

となっている。ここでわれわれは副題を有するテキストはすべて表題に「願生偈」とうたっていないことに気付く。

また、尾題は以下の通りである。

(1)無量寿経優婆提舍経

開元寺版

(2)無量寿経論

思溪版、高麗再雕版、房山雲居寺石刻本、正倉院聖語藏本

(3)無量寿経優婆提舍

磧砂版、杭州版

(4)無量寿経優婆提舍願生偈 親鸞加点本 『論註』に引用された『論』

東禪寺版、房山雷音洞本は尾題なしである。このように尾題に至っても様々である。因みに、表題、尾題ともに一致しているのは、開元寺版、正倉院聖語藏本、磧砂版、杭州版の四本である(表1参照)。

次に、経録を見るに、

費長房撰『歴代三宝紀』(五九七)^⑦、道宣撰『大唐内典録』(六六四)^⑧では、

無量寿経優婆提舍経論

となっており、これと一致するものはないが、東禪寺版、開元寺版、思溪版の「無量寿経優婆提舍経」が最も近いといえる。

表 1

| テキスト名 | 表題 | 副題 | 尾題 |
|------------------------|----------------------|----------------------|----------------------|
| ・東禪寺版 | ・無量寿優 波提舍經 | ・無量寿經 優波提舍 願生偈 | なし |
| ・開元寺版 | ・無量寿優 波提舍經 卷第八 | ・無量寿經 優波提舍 願生偈 | ・無量寿優 波提舍經 卷第八 |
| ・思溪版 | ・無量寿優 波提舍經 | ・無量寿經 優波提舍 願生偈 | ・無量寿經 論 |
| ・磧砂版 ・杭州版 | ・無量寿經 優波提舍 | ・無量寿經 優波提舍 願生偈 | ・無量寿經 優波提舍 |
| ・高麗版 | ・無量寿經 優波提舍 願生偈 | なし | ・無量寿經 論一卷 |
| ・房山 雷音洞 | ・優波提舍 經願生偈 | なし | なし |
| ・房山 雲居寺 | ・無量寿經 優波提舍 | なし | ・無量寿經 論一卷 |
| ・正倉院 聖語藏本 | ・無量寿經 論 | ・優波提舍 願生偈 | ・無量寿經 論一卷 |
| ・『論註』に 引用され る『論』 | ・無量寿經 優婆提舍 願生偈 | なし | ・無量寿經 憂婆提舍 願生偈 |

また、法経等撰『衆経目錄』(五九四)、彦惊撰『衆経目錄』(六〇二)¹⁰、静泰撰『衆経目錄』(六六五)¹¹、明佺撰『大周刊定衆経目錄』(六九五)¹²、智昇撰『開元釈教録』(七三〇)¹³では、無量寿経論

となっており、正倉院聖語藏本のもの一本のみがこれに一致するのである。しかし、尾題のみから見ると、思溪版、房山雲居寺石刻、高麗再雕版も『無量寿経論』を支持しているのである。

このように経録から見ると、『無量寿経優波提舍』や『無量寿経優波(婆)提舍願生偈』という題目は見られない。各テキスト、経録に共通して見られるのは、『無量寿経論』である(表2参照)。したがって、『論』のサンス

クリット語での題目を単純に *Sukhanatpynkopadesa* とするのは早計だといってよい。さらに言うのならば、『論』の具名を『無量寿経優波提舍願生偈』とするのはあまりにも軽率ではないだろうか。

安達俊英氏の研究^[4]によると、

「無量寿（仏）」、もしくはそれに関連する何らかの経典（群）の「優波提舍」とも理解され、必ずしも「無量寿経」という名称の経典に対する論という性格の文献とは限らないことになる。

という。

表 2

| 表題 | テキスト名 | 経録名 |
|--------------|---------------------------|---|
| ・無量寿優波提舍経 | ・東禅寺版 ・開元寺版 ・思溪版 | なし |
| ・無量寿経優波提舍 | ・磧砂版 ・杭州版 ・房山雲居寺石刻本 | なし |
| ・無量寿経優波提舍願生偈 | ・高麗版 | なし |
| ・優波提舍願生偈 | ・房山雷音洞石刻本 | なし |
| ・無量寿経論 | ・正倉院聖語藏本 | ・法経録 ・彦惊録 ・静泰録 ・大周刊定衆經目錄 ・開元釈経録 |
| ・無量寿経優波提舍願生偈 | ・『論註』に引用される『論』 | なし |
| ・無量寿優波提舍経論 | なし | ・歴代三宝紀 ・大唐内典録 |

また、七寺（稻菌山長福寺）所蔵の『古聖教目録』の中に

阿弥陀優婆提舍願生偈一卷

と見える。¹⁵さらには、『論』に註を施した曇鸞は『略論安樂浄土義』の中で、

若依無量寿論 以二種清浄撰二十九種莊嚴成就

と記している。¹⁶これらからすると安達説のように「阿弥陀（無量寿）仏に関する經典の論」と解釈するのが良いように思われるが、資料不足のため、結論を急ぐことは危険である。

三、一一偈上の句（妙声功德成就）について

一一偈上の句は、『論』高麗再雕版、及び房山雲居寺石刻本では、

梵声語深遠 微妙聞十方

とあり、訳を付すと、「¹⁷仏の」浄らかな声が語るところは深遠である。」となり、また、『論』宋版系統、及び『論註』に引用されている『論』では、

梵声悟深遠 微妙聞十方

とあり、訳を付すと「¹⁸仏の」浄らかな声が〔衆生を〕悟らせることは深遠である。」となる。「語」と「悟」の字句の異同である。おそらく旁や音が同じであるために写本の筆写者が写本を転写する際に誤って書き写したと思われるが、はたしてどちらが原型であろうか。

曇鸞が「梵声語深遠」ではなくて、「梵声悟深遠」を引用して註を施していること、また、隋末唐初とされる房

山雷音洞石刻本が「梵声悟深遠」となっていることから原型は「梵声悟深遠 微妙聞十方」と断定してよいと考えられる。¹⁹⁾

四、一二偈について

『論』 雨天樂華衣 妙香等供養 讚仏諸功德 無有分別心。²⁰⁾

『論註』 雨天樂華衣 妙香等供養 讚諸仏功德 無有分別心。²¹⁾

訳を付すと、前者は、

〔諸々の菩薩は〕天の音楽、華、衣、妙なる香りなどを雨のように降らせて供養し、仏の諸々の功德を讃えて
思い計らう心がない。

となり、後者は、

〔諸々の菩薩は〕天の音楽、華、衣、妙なる香りなどを雨のように降らせて供養し、諸々の仏の功德を讃えて
思い計らう心がない。

となる。すなわち、いづれにしても、仏の功德を讃えることには相違ないが、『論』では阿弥陀仏の功德、『論註』では阿弥陀仏を含めた仏の功德を讃えるという異説が生じることになる。

そこでこの偈頌に対する長行の解釈を見るに、『論』では、

三者彼於一切世界無余照諸仏大衆無余広大無量供養恭敬讚歎諸仏如来。

「三には、かの〔菩薩〕は、すべての世界において、残すところなく諸仏の会座の大衆を照らし、残すところ

なく廣大無量に諸仏・如来を供養し、恭敬し、讚歎する。」

とあり、『論註』では、次のようにある。⁽²²⁾

三者彼於一切世界無余照諸仏大衆無余廣大無量供養恭敬讚歎諸仏如来功德。

「三には、かの〔菩薩〕は、すべての世界において、残すところなく諸仏の会座の大衆を照らし、残すところなく廣大無量に諸仏・如来の功德を供養し、恭敬し、讚歎する。」

『論』『論註』ともに諸仏・如来とあつて、阿弥陀仏のみではなく、阿弥陀仏を含めた諸仏が意識されているのである。これらから判断すると、二二偈は、「讚諸仏功德」(『論註』に引用される『論』)という形が原型で、「讚仏諸功德」(『論』)は入蔵されるまで何らかの事情(誤読、誤写など)によつて手が加えられたのであろう。

五、迴向門について

迴向門とは、五念門の一つであり、礼拝門、讚歎門、作願門、觀察門の修習によつて集められる功德をすべての衆生に迴向して共に安樂國に往生しようと願うことである。しかしながら、解義分における迴向門の説明の箇所が、高麗再雕版と東禪寺版などの宋版系統とでは字句の異同が甚だ激しく、したがつて、迴向門の内容も大きく異なるのである。⁽²⁴⁾

高麗再雕版では、

不捨一切苦惱衆生。心常作願迴向為首。成就大悲心故。

「一切の苦しみ悩んでいる衆生を捨てず、心に常に願をなし、迴向することを第一とする。〔それは〕大悲心

を成就しようとするからである。」

とあり、東禪寺版などの宋版系統では、

於彼觀察一切世間苦惱衆生。同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便作願迴向。攝取衆生不捨一切世間故。
「かしこ（安樂国土）において一切世間の苦しみ悩んでいる衆生を觀察する。同じく（一同）かの安樂国土に生まれたいと願い、心のあらゆる功德善根を願い巧みな方便をもって作願し、迴向する。」

とある。⁽²⁶⁾前者は、自分の功德を衆生に迴施して、安樂国土に往生しようとするが、後者は、かしこ（安樂国土）に往生し、そこで衆生を觀察し、自分の功德を衆生に迴施するという相違が生じることになる。つまり、高麗再雕版では往相迴向であり、東禪寺版などの宋版系統では還相迴向なのである。果してどちらが原型であろうか。

宗暁（一一四一—一一四四）は『樂邦文類』卷第一に、⁽²⁷⁾

迴向門。所有功德善根以方便迴向攝取衆生不捨一切世間故。

と東禪寺版などの宋版系統の文を引用している。しかし、『論』に対して註を施した曇鸞は、

不捨一切苦惱衆生。心常作願迴向為首。得成就大悲心故。

「一切の苦しみ悩んでいる衆生を捨てず、心に常に願をなし、迴向することを第一とする。（それは）大悲心を成就できるからである。」

とし、「得」の出入はあるが、高麗再雕版を支持している。ボーデルチ（菩提流支）が『論』を訳出した年（五三一年、あるいは五二九年）と曇鸞の年代（四七六—五四二？）からすれば、高麗再雕版が原型であろうと考えられる。⁽²⁹⁾

六、五念門と五門

『論』

菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。³⁰

「菩薩はこのように五門の行を修して、自利利他して速やかにこの上ない完全な悟りを成就することができるからである。」

『論註』

菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。³¹

「菩薩はこのように五念門の行を修して、自利利他して速やかにこの上ない完全な悟りを成就することができるからである。」

つまり、ここでは、五念門と五門との異同であるが、五念門というのは、論自身にあるように、

何等五念門。一者礼拝門。二者讚歎門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門。³²

「五念門とは何か。一には礼拝門、二には讚歎門、三には作願門、四には觀察門、五には迴向門である。」

の五つを指すのである。これに対して五門というのは、

何者五門。一者近門。二者大会衆門。三者宅門。四者屋門。五者園林遊戲地門。³³

「五門とは何か。一には近門、二には大会衆門、三には宅門、四には屋門、五には園林遊戲地門である。」

の五つを指す。五念門と五門とは、それぞれ対応していることは今さら述べるまでもないが、根本的に異なるのは、

五念門というのは安楽国土に生まれるための実践であり、それに対して五門というのは、五念門を修し、その行が成就することによって得ることのできる五つの功德を指すのである。ここでは「念」という字の出入に過ぎない異同であるが、その意味するところは大きく異なるのである。つまり、五念門は実践されるものであつて、その結果、五門が得られるからである。

したがつてコンテキストからすれば、「修五門行」（『論』）よりも、「修五念門行」（『論註』）に引用される『論』の方が良いと考えられる。しかし、興味深いことに右記に対する曇鸞の注釈では、

問曰。有何因縁言速得成就阿耨多羅三藐三菩提。

答曰。論曰修五門行以自利利他成就故。

「問う。どういう訳で、「速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することができる」と言うのか。

〔それについて〕答える。『論』に「五門の行を修める。それによって自利利他を成就する」とあるからである。」

とある。⁽³⁴⁾ここでいう論とはもちろん『無量寿経論』を指しており、『論』には「五念門」ではなく、「五門」とある。先に見たように、『論註』に引用される『論』では「五念門」とあり、曇鸞の注釈では、「五門」とある。果して曇鸞が見た『論』は「五念門」となっていたのであろうか、という疑問が生じてくるのである。

しかしながら、この箇所を合理的に読むのならば、『論』の「菩薩は五門（五つの功德）の行を修す（修五門行）」というよりも、『論註』に引用される『論』の「菩薩は五念門（五つの行）を修す（修五念門行）」と読む方が良いのではないかと考えられる。

まとめ

以上、『論』の特に大きく異説が生じる箇所、すなわち、題目、一一偈上の句、二二偈、迴向門、五念門と五門の五つを取り上げて検討した。

① 『論』の正式名称を、『無量寿経優波提舍願生偈』とするのは、慎重にならざるを得ない。一朝一夕では到底解決のできない問題であろう。今後の課題である。

② 一一偈上の句は「梵声誦深遠」ではなくて、「梵声悟深遠」が原型であると考えられる。

③ 二二偈は、「雨天樂華衣 妙香等供養 讚諸仏功德 無有分別心」と『論註』に引用されている偈が原型であると考えられる。

④ 宋版系統の「於彼觀察一切世間苦惱衆生。同願生彼安樂国土願心所有功德善根以巧方便作願迴向。攝取衆生不捨一切世間故」ではなく、「不捨一切苦惱衆生。心常作願迴向為首。成就大悲心故」（高麗再雕版）が原型であると考えられる。

⑤ 『論』の「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故」よりも『論註』にあるように「菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故」が原型であると考えられる。

今回は大きく異説の生じた箇所を取り上げて検討したが、この他にも字句の異同、異説の生じる場所も少なくない。今後、筆者はこれらの箇所を検討を加え、『論』の原型を探りたいと考えている。

- (1) 『論註』には、『論』の全文が引用され、注釈の対象となっている。
- (2) 辻本俊郎「無量寿経論テキスト考」、「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）所収。
- (3) ここでいう一八六字というのは、高麗再雕版所収『論』と親鸞加文本『論註』に引用された『論』の字数の差である。
- また、字数のみならず、字句の異同も甚だしく、さらには、曇鸞は『論』の内容を十節（願偈大意、起観生信、観察体相、浄入願心、善巧摂化、障菩提門、順菩提門、名義撰对、願事成就、利行満足）に分けたが、どの『論』テキストもこの形式で改行していない（前掲拙稿参照）。
- (4) 小論では、『論』テキスト間の大きく異説の生じた箇所を取り上げた。『論』テキスト間の詳細な字句の異同は、「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）を参照されたい。
- (5) 岸一英氏は「三種二十九句の莊嚴の点に立つて觀察の立場から極楽浄土の有り様をまとめて論じた書として『浄土論』と通称し、また極楽浄土に往生するための行法である五念門の立場に立つての往生のための論としての通称が『往生論』とされたもの」とする（岸一英『無量寿経論』校異の意義、「浄土教の総合的研究」研究班編（一九九九）所収）。
- 『往生論』の名の初見は慧遠（五二一—五九二）の『観無量寿経義疏』、『浄土論』の名の初見は道綽（五六二—六四五）の『安樂集』に見られる。ここで注意したいのはかなり早い時期に『往生論』、『浄土論』と通称されていたということである。
- (6) 柴田泰氏は、『論』の正式な題名は『無量寿経優波提舍願生偈』と結論づけている（柴田泰（一九九七））。

- (7) 『大正蔵』四九卷 八六上。
- (8) 『大正蔵』五五卷 二六九中。
- (9) 『大正蔵』五五卷 一四一上。
- (10) 『大正蔵』五五卷 一五三中。
- (11) 『大正蔵』五五卷 一八六上。
- (12) 『大正蔵』五五卷 四〇七下。
- (13) 『大正蔵』五五卷 五四一上、六〇七下。
- (14) 安達俊英 (一九九九)。
- (15) 牧田諦亮監修、落合俊典編集 (一九九八) 『七寺古逸經典研究叢書』第六卷 二二一頁。
- (16) 『浄土宗全書』一卷 六六六上。
- (17) 『大正蔵』二六卷 二三一中。
- (18) 「浄土教の総合的研究」研究班編 (一九九九) 五八頁。真宗勸学寮編 (一九二五) 卷上、一九頁。
- (19) 塚本善隆 (一九三五) 九三頁—九四頁参照。また、同書の口絵には房山雷音洞石刻本の拓本が紹介されている。
- (20) 『大正蔵』二六卷 二三一中。
- (21) 真宗勸学寮編 (一九二五) 卷上、三五頁。
- (22) 『大正蔵』二六卷 二三二中。
- (23) 真宗勸学寮編 (一九二五) 卷下、三八頁。
- (24) 梶山雄一博士は「廻向の思想は空の論理なくしては成り立たない。(中略) 功德の内容あるいは方向の転換は、業

も果も本質的には実体のない、空なるものであるからこそ可能となる。阿弥陀仏が自己の功德を迷える人びとにめぐらすということは、仏も衆生もともに空であり、不二であるからである。衆生が自分の善行の功德をさとりに転換できるのも、功德とさとりがともに空であり、不二であるからである。こうしてみると、空の思想は、廻向の思想に論理を与えたことがわかるのである。」と指摘する。(梶山雄一(一九九七)六〇頁―六一頁)。

- (25) 『大正蔵』二六卷 二三一中。
- (26) 「浄土教の総合的研究」研究班編(一九九九)六四頁。
- (27) 『大正蔵』四七卷 一六三中。
- (28) 真宗勸学寮編(一九二五)巻下、六頁。
- (29) 菩提流支と『論』、菩提流支と曇鸞、曇鸞と『論』の関係については、岸前掲論文参照。
- (30) 『大正蔵』二六卷 一三三上。
- (31) 真宗勸学寮編(一九二五)巻下、五一頁。
- (32) 『大正蔵』二六卷 一三一中。
- (33) 『大正蔵』二六卷 一三三上。
- (34) 真宗勸学寮編(一九二五)巻下、五一頁。

参考文献

- 安達俊英 (一九九九)：「浄土三部経」と『往生論』、『佛教学総合研究所紀要別冊 浄土教の総合的研究』
- 梶山雄一 (一九九七)：『さとりと』と『廻向』―大乗仏教の成立― 人文書院

- 柴田 泰 (一九九六) : 『中国仏教における『浄土論』』 『浄土論註』 の流伝と題名 (一) 『印度哲学仏教学』 第十一号
- 柴田 泰 (一九九七) : 『中国仏教における『浄土論』』 『浄土論註』 の流伝と題名 (二) 『印度哲学仏教学』 第十二号
- 「浄土教の総合的研究」 研究班編 (一九九九) : 『無量寿経論校異』 佛敎大学総合研究所
- 真宗勸学寮編 (一九二五) : 『浄土論註校異』 真宗勸学寮
- 真宗敎学研究所編 (一九七二) : 『浄土論註総索引』 東本願寺出版部
- 高瀬承蔵 (一九一七) : 『類本往生論に就きて』 『仏書研究』 第二九号
- 武内紹晃 (一九九三) : 『世親—唯識思想と浄土論』 『浄土仏敎の思想』 第三卷 講談社
- 塚本善隆 (一九三五) : 『石刻山雲居寺と石刻大蔵経』 『東方学報』 京都第五册副刊 東方文化学院京都研究所
- 藤堂恭俊 (一九九五) : 『曇鸞—浄土敎を開花せしめた人と思ふ』 『浄土仏敎の思想』 第四卷 講談社
- 藤堂恭俊 (一九九四) : 『無量寿経優婆提舍願生偈 (往生論) 解題』 『浄土宗聖典』 第一卷 浄土宗
- 早鳥鏡正・大谷光真 (一九八七) : 『浄土論註』 (仏典講座二三) 大蔵出版
- 山口 益 (一九六六) : 『世親の浄土論』 法蔵館